



どうしてこんな 見方ができるんだ！

鳥海 房枝

(東京都北区・保健婦)

「どうしてこんな見方と考え方ができるんだ」。それにしても自分は今まで何を考えてやってきたんだろう。これが三好さんの話を聞いた最初の感想です。「目からウロコ」はよくいうけど、それを通りこして頭をガーンと殴られ真っ白な状態に近かったと思います。

三好さんに出会ったのは、今から8年前。訪問従事者（保健婦・看護婦・理学療法士・作業療法士）の研修会を企画したとき、「三好春樹か、ゆきぐに大和の黒岩卓夫」と、理学療法士から講師の希望が出たのです。「黒岩さんの名前は知ってるけど、三好春樹って何者なんだ？」が、当時の私の正直な想いでした。でも、謝金の予算額も少ないし、とりあえず近いほうの三好春樹にしてみるか。それに在宅をやっている理学療法士なら、お世話になったことがある大田先生の名前を使えば引き受けてくれるかも知れない。といった軽いノリで講師を依頼しました。その研修会での印象が冒頭の表現です。

三好さんに会ってから、著書を読んでみようと思いたち、最初に手にしたのが『介護覚え書』です。これには身のほど知らずにも「怒りと嫉妬」に近いものを感じました。その理由は、なぜ看護職でなく理学療法士の三好春樹にこれを書かれてしまったのかという想いです。そして、看護職のなかでも保健婦はとくに生活を見るときいいながら、年寄りのそれをどうみていたのかを、自分自身につき

つけられました。

いまや老人介護をめぐる問題は、皮肉にも世の中の脚光を浴びる存在になりました。そして、バリアフリー住宅や介護機器の導入が、「福祉の充実」の名のもとに進められようとしています。でも、段差のない住宅が本当にどれだけの人に必要なのでしょうか。高温多湿の気候から生まれた日本の住宅構造は、ひとつの文化であるはずで、同様に、介護用とも自立用とも称している83cm幅のベッドも、長い間使われている三幅布団より狭いのは変だと思います。いま一番必要なのは、距離をもってこれらを常識で考えることです。

保健婦は、健康に関わる問題に直面すると、そうならないための“予防”をいいがちです。でもこの予防は、限りなく生活を規制する側面ももっています。とくに年寄りについては、これがマイナスにすらなると感じています。

三好さんに会ってから、どうしたらこの年寄りから笑顔と元気を引き出せるかを、第一に考えるようになりました。生活とは“何でもあり”の場所です。どんな援助もあっていいはずで、また、役所だからこそ儲ける必要もないし、何でもできると思うのです。そしてよくいわれる責任も、自分でとれる範囲でしか問われないものです。「生老病死」その死にいちばん近いところにいる年寄りの、明日のためでなく今日を花マルにするような関わり方をしたいと考えています。